

Title	Attributive Adjective の一考察
Author(s)	小谷, 晋一郎
Citation	Osaka Literary Review. 9 P.1-P.13
Issue Date	1970-12-14
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25733
DOI	10.18910/25733
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Attributive Adjective の一考察

小谷 晋 一 郎

1. 変形生成文法においては, attributive adjective は次の三つの変形規則によって説明されている。即ち第一段階として, 文を名詞に関係詞節として結びつける。第二段階として 'wh-be' の削除により postnominal modifier, noun + adjective (以下 NA と略記) を生成する。最後に modifier を名詞の前に移動させて adjective + noun (以下 AN と略記) とする。

この生成については Bolinger¹ の批判をはじめ, 諸学者の論議の集中しているところである。一方変形文法家の方もこの問題に関して数多くの論文を發表し, 次第に理論を精密化している。その中でも Vendler² は名詞, 名詞語句を分類した上で, その各分類された名詞との結びつきにより形容詞を分類し, その生成, 名詞修飾の順序などを統一的に説明しようと試みている。しかし現状はまだ十分に解明された段階とはいええず, 依然として "their details are anything but clear"³ といった状態のように思われる。

本論においては, 単一形容詞の名詞の前におかれた場合 (AN) と, 名詞の後におかれた場合 (NA) の機能を比較考察し, その相違を be 動詞及び形容詞の feature のあり方に求め, それに基く attributive adjective の生成を考究しようとするものである。

2. This tree is tall. と a tall tree の二つの表象結合を比較するとき, 前者は二つの判断作用が行なわれ, その結果として二つの表象が結合しただけである。これに対し, 後者には発生的には this tree is tall なる二重判断がまずあり, その反省があって a tall tree なる表象の結合がなされるものと思われる。しかし a tall tree の tall は中心語 tree

の意味の一部を表わしていて、tree なる同一実体の上に二つの表象が重なって結合し、その結果 a tall tree という一つの表象として把握されるのである。このように考えてくると、predication は attribution ほど表象の結合が緊密でなく、一時的性質、状態を述べていることが明らかである。次の二文を比較するとこのことがよりはっきりする。

(1) He is a *foolish person*. (= a fool)

(2) The *man* is *foolish*.

(1)の AN が一語 fool で云いかえうることは、AN の結合の緊密さをよく表わしている。(2)の N+A はただ二つの判断の結合にすぎない。

(1)にみられる表象結合の緊密さは、しばしば感情表現に反映される。すなわち強い感情を表わすには、間接的、説明的な predication よりも、強い表象結合を表わす attribution の方が好まれる。⁴

(3) A *beautiful sight* !

(4) Indeed it was a *beautiful sight* !

cf Indeed the *sight* was *beautiful* !

predication で表わさざるをえないような時でも、強い感情がこもるときは、one と結びついた attribution の形式をとる。

(5) The *sight* is indeed a *beautiful one* !

このように attribution は発生的には predication に源をもちながらも、機能的には、はっきり区別されているのである。⁵

このように両者の間には明らかな相違があるにもかかわらず N. wh-be. A → NA → AN の変形を可能にしているのは何であろうか。又そのような変形が可能な形容詞はどんな制限が課せられなくてはならないであろうか。これらの問題を考究するため、変形の第二段階 NA と最後に生成される AN の比較をすることにする。

(6) (a) a mob *throwing stones*, a mob *shouting clamorously*
 a mob *parading the streets quietly*

(b) a *stone-throwing* mob, a *clamorous* mob
 a *good-natured* mob

[中島]

(a)と(b)を対照してみれば明らかなおり、前者はある時の mob の状態を述べているのに対し、後者は或種の mob を表わしている。

(7) (a) *visible stars* (肉眼で見える星)

(b) *stars visible (tonight)* (今夜見える星)

(a)は光度の高い星のことを云っており、(b)はある一時的にそのような状態の星のことをいっているのである。

(8) (a) The classification *adopted* has many advantages.

(b) Mary was an *adopted* child. [Zandvoort]

これも明らかに一時的な行為と、種類をいっていて、意味に相違があるのである。

以上の諸例より、NA, AN 両形式の A はいずれも N を限定しているながらも、その限定の仕方に明らかな相違がみられることがわかる。NA の諸例はいずれも名詞の一時的状態、性質といったものを述べているのに対して、AN の方は名詞の恒常的性質、種類又は比較的長く続く状態を述べているのである。即ち AN と NA では機能を異にしている AN は attribution であり NA は predication 的である。Zandvoort は次のように述べている。⁶

NA : "...contains two distinct ideas expressed by two strong-stressed words. The relation between the noun and adjective is semi-predicative rather than attributive."

AN : "...close groups expressing a single idea."

NA, AN の A の果している機能の相違がいつもこのように明らかに見られるかといえば必ずしもそうではない。次の諸例を比べてみる(後に述

べる理由のため NA の例がとほしいので関係詞節のままの例を用いる)。

(9) (a) a child *three years old*

(b) a *three-year-old* child

(10) (a) a lady *who is young*

(b) a *young* lady

(11) (a) people *who are poor*

(b) *poor* people

これらの諸例においては、NA と AN との差はあまり感じられない。

(6)–(8)までの諸例においては modifier がいずれも動詞的性格を多少ともとどめているため、attribution と predication の本来の機能の相違が際立っているのである。しかし(9)–(11)においては modifier がいずれも純粹の形容詞であって、性質、種類、持続する状態といったものを表わしているため NA と AN との間には意味上顕著な相違を惹きおこさないのである。このような(9)–(11)のような形容詞と名詞の結びつきは Jespersen のいう「直接的関係」で結ばれたものであることがわかる。即ち $N \text{ wh-}be \ A \rightarrow NA \rightarrow AN$ の変形が可能な形容詞は名詞との関係が直接的関係で結ばれるものでなくてはならない。

変形生成文法においては、native speaker の直観で

(12) $Nom + be + Adj$ descriptive

の形を持つ文は“Attribute”という概念の統合論的定義と考える。即ち、 Adj_d は Nom に対して attributive であるとしている。⁷

そしてこれに基き統合論上の立場から諸々の構造を統一的に、最も簡潔に説明しようとして、本論の最初に述べた規則により attributive adjective の生成を記述しているのである。その結果として、(9)–(11)のような例はきれいに説明されるが、(6)–(8)のような例は predication と attribution の差が明らかに現れてくるので説明困難になるのである。変形文法家の諸論文には生成の中間段階の NA の記述がごく少ないことは、このことを端

的に物語っていると考えられる。前述の Vendler の包括的な名詞語句と形容詞の分析記述の論文も *prenominal adjective* はいかなる基底文より生成されるか及びその公式化にその中心をおいていて、NA のことには少しもふれていない。

NA, AN の両様の限定が可能な形容詞は今迄みて来たように夫々異なった機能を持っているのに対し、AN のみ可能で NA が非文法的な文となるような形容詞は、AN と NA では意味上あまり差のないものである。即ち NA なる形を言語表現上必要としないことがその非文法性の一因であらう。

an apple *which is red* → ^{*}an apple *red* → a *red* apple

この例を見ても三者の意味に大差はないのである。但しこの種の形容詞でも *complement* を伴う場合は NA の可能な場合もあるが、これは本論では扱わない。

そこで、文法的 NA のみを生み出し、非文法的 NA を排除するにはどうしたらよいか、ということが問題となってくる。

3. 変形文法の枠組の中で、前節に述べたような問題点を考慮しながら NA の問題を考究していく上で、Bolinger の *be-predication* の分析は非常に参考となる。Bolinger の分析を紹介しそれを応用することにより問題を解決しようとするものである。

第二節において筆者は NA と AN の機能の差は形容詞の種類によることをみてきたが、Bolinger は “N+be+A” の文そのものが曖昧であって、二通りの読みがあるからだと考えて、次のように説明する。

(13) The only river that *is navigable* is to the north.

(14) (a) The only river *navigable* is to the north.

(b) The only *navigable* river is to the north.

(13)は二通りの読みがあって曖昧である。即ち一時的な河の状態であるか、

又は恒常的性質をいっているものかあいまいである。ところが(14)の(a), (b)のように NA, AN となると(a)は一時的状態, (b)は恒常的性質を表わしていて曖昧さはない。これは be 動詞に二つの異なった機能があるからである。それが形容詞をえらぶのである。

(15) (a) The man is mad. (=insane)

(b) The man is mad. (=mad with anger)

(15)は(a), (b)ともに同じ言語形式を持っていながら曖昧さが生ずるのは, be 動詞に二つの aspect があるからである。ここで Bolinger は be 動詞の二つの aspect. 'temporary' と 'non-temporary' を認めている。(15) (a)の 'is' は non-temporary be であり, (b)の 'is' は temporary be である。

英語においては文法形式として aspect はあるとはいえないが, 意味の面で aspect を認めることは差支えないと考えられるから, be の二つの aspect の区別は妥当であると考ええる。

この be 動詞の二つの aspect の存在を支持するものとして次の諸例をあげることができる。

(16) non-temporary *be*

(a) John *is* a boy.

(b) My name *is* John.

(c) John *is* tall.

(17) temporary *be*

(a) You are *being* silly, Mary.

(b) I'll *be* over tonight. (=go to your house)

(c) *Be* careful.

(d) I think *I'm* stupid today. --A. Christie

(17)の be はいずれも一般動詞的性格を持ち, その temporary aspect は明らかである。この be 動詞の二つの aspect はそれぞれ第二節に述べた一時的状態, 性質を表わす形容詞; 恒常的性質, 種類, 持続する状態を

表わす形容詞を撰択する。

(18) be temporary + adjective temporary

(19) be non-temporary + adjective non-temporary

この撰択は lexicon に feature として, temporary, non-temporary の各 feature を be も adjective もそれぞれ記述されており, 話者は統合論上の観点から, (18)又は(19)の組合せをえらぶことになる。

(15)の例に以上のことを図式的にあてはめてみると次のようになる。

(20) (a) The man is mad. (=insane)

be non-temp | adj. non-temp

(b) The man is mad. (=angry)

be temp | adj. temp

今迄みてきた AN 構造の諸例の基底部構造はどれも(19)の形の predication であることがわかる。N+be temp+A temp なる基底部構造をもつものは attribution の本質からいって AN にはなりえないことになる。

(21) The man is mad (=angry)

→* the mad man (=the angry man)

然し A non-temp の adjective はどの程度の継続性がなくてはならないかは話者によって差異があるので一定の規準は定められない, と Bolinger はいっている。

以上のことをまとめてみると次のようになる。

(22) be に関する書き換え規則

be の動詞性を認めるのであるから, be は変形によって導き出された morpheme ではなくて, VP に直接支配される構成素である。

S → NP ^ VP

VP → be ^ $\left\{ \begin{array}{l} (NP) \\ (PP) \\ (S) \\ (AP) \end{array} \right\}$

$$NP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} N \widehat{ } (S) \\ NP \widehat{ } S \end{array} \right\}$$

$$PP \rightarrow P \widehat{ } NP$$

$$AP \rightarrow A \widehat{ } \left\{ \begin{array}{l} (PP) (PP) \\ (S) \end{array} \right\}$$

(23) lexicon においては

(a) be は semantic feature として

<± temporary> をもつ。

(b) adjective は semantic feature として

<± temporary> をもつ。

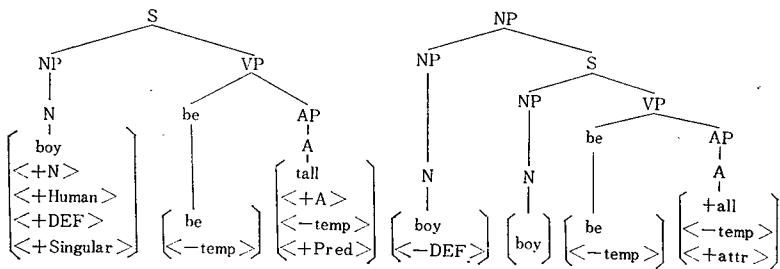
(c) adjective は syntactic feature として

<± predicative>, <± attributive> をもつ。

具体的に基底部構造を図示する。(多くの省略がある。)

(24) The boy is tall.

(25) a tall boy



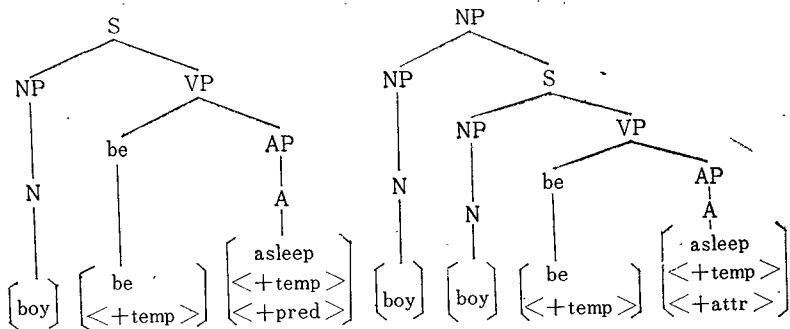
このように tall のような <-temp> の A は, attributive に用いられる時は AN の形をとる。

(26) The boy is asleep.

(27) a boy asleep

<+temp> の featureを持つ A は AN の構造にはなりえないが, NA にはなりえるから, その場合には <+attr> の feature を持つことになる。NA は機能的には semi-predicative であるが形式的には A は N を

限定しているのだから <+attr> として差支えない。



特に注意すべき例は A<-temp> でありながら <-pred> を持つ形容詞 (e. g. the main reason,) があるがそれらは be-predication 以外の方法で生成されなくてはならぬから、本論では取り扱わない。然し lexicon で A<-temp>, <-pred> とあれば基底部構造はどうあるにしても、表層構造は AN しかとりえないことになる。⁹

(2) 変形

(a) N wh-be A → * NA → AN

但し be<-temp>, A<-temp>, <+attr>

wh-be を削除したあとの NA は、A が <-temp> なる故第二節でみたように非文法的となり、必然的に AN の形に変形されなくてはならない。例. an apple which is red → * an apple red → a red apple

(b) N wh-be A → NA

但し be <+temp>, A <+temp>, <+attr>

wh-be は削除できるが A が <+temp> なるため名詞の前には移しえない。例. the boy who is asleep → the boy asleep

このように変形して NA, AN を生成す場合に, (a), (b)にあげた条件は

一語形容詞の場合についてのものであって、形容詞が補語をとる場合には又条件を加えて制限しなければならないが、本論ではそれには入らない。

4. 前節においてはもっぱら形容詞のみを扱ったが、本節では分詞について少しふれておく。

(29) a *running* dog ← a dog which is running

(30) a dog *barking* ← a dog which is barking

共に分詞が名詞を限定している例であるが、*running* と *barking* と時間的にどちらが長いかというように実際の時間を持ち出すとすれば問題が混乱するだけであるから、この場合話者の発話の際の意識の中における *temporariness* と考えていくことにする。形容詞の場合と同様に分詞の場合においても <±temporary> の feature を持つとして考えると統一的に、簡潔に扱えるように思われる。話者には(29)の *running* は相対的に <-temp> と意識され、(30)の *barking* は相対的に <+temp> と意識されたと考えられる。

統合論上の扱いとしては(30)の基底部の *is barking* は現在進行形と考え(29)の *running* は現在分詞形容詞と考えたらよいではないかと思われる。

(*running* を AN の形で使うことは話者がそれを形容詞的に意識している証拠である。)

(29)の基底部の *is running* の *be* 動詞はVP に直接支配される構成素であって(29)に示した *be*<-temp> と同様の扱いをする。

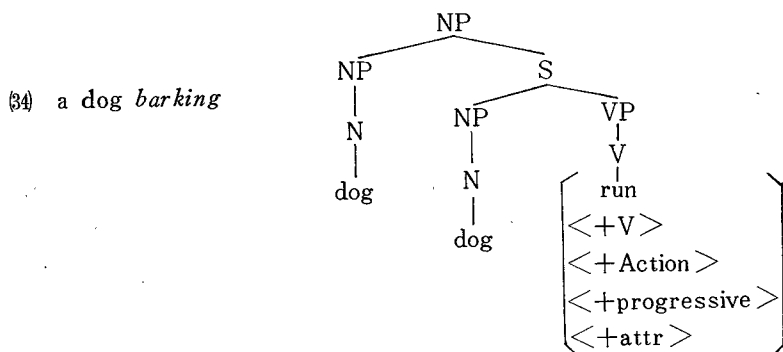
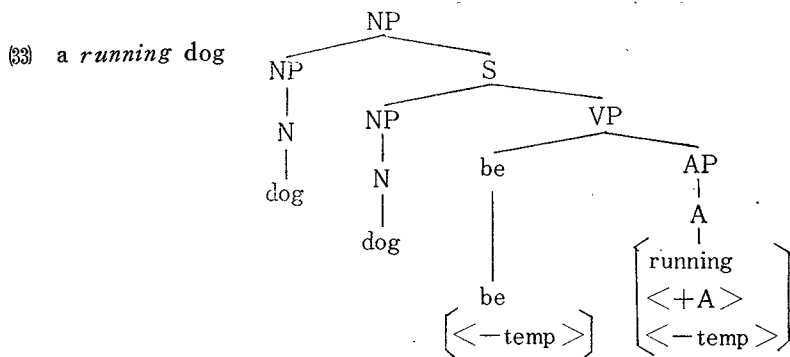
(30)の基底部には *is* はなく、*is* は助動詞であって変形により導入された *morpheme* と考える。

(31) a very *tired* boy ← a boy who *is* very *tired*

(32) Among the guests *invited* were some ladies. ← Among the guests who *were invited*...

これらも(29)、(30)と同様に考えてよいと思われる。(31)の *is* は <-temp>

を持つ VP の構成素, tired は A<-temp>, ㉒の were invited は受動態で, were は変形により導入された morpheme で助動詞と考える。このようにすると(㉒), (㉓)の場合 AN ← N wh- be <-temp> A<-temp>と同じように取扱うことができる。これに対して(㉑), (㉒)の場合 NA の形をとるが be が助動詞のため feature を持ちえない。然し動詞の feature 及び tense (progressive) でその temporariness は明らかであるから NA ← N wh- be<+temp>A<+temp>の場合と同様に扱ってよいと思われる。(㉒)の基底部構造は次のようになる。(多くの省略がある。)これが変形され



て is, barking を生み出し, それから (㉒)(b)の変形規則を受けて a dog barking の形が生成されると考える。

然し以上の扱い方には多くの問題があるように思われる。

5. 以上述べてきたことを要約すると次のようになる。AN と NA とでは A の果す機能に相違がある。前者は *attributive* であるが、後者は *semi-predicative* である。この AN と NA の生成と機能の差を解明するため *be* 動詞の二つの *aspect* を区別し、また形容詞の *feature* として $\langle \pm \text{temporary} \rangle$, $\langle \pm \text{attributive} \rangle$, $\langle \pm \text{predicative} \rangle$ を設定した。それと共に、書き換え規則、変形規則に多少の修正を加え *attributive adjective* を統一的に説明しようと試みたのである。勿論形容詞は多様であって、名詞との結びつきもまた一様ではない。本論は形容詞と名詞との結びつきを、語順に中心をおいて、変形文法の立場で、一部の形容詞について解明しようとした一試論である。

注

1. Bolinger (1967)
2. Vendler (1968)
3. Ross (1966)
4. Curme, *Syntax*, §. 6 Ba—7 Ba
5. Jespersen の *Nexus, Junction* 参照
6. Zandvoort, §. 702
7. オーエン・トーマス 6.1
8. 岩倉国浩 (1969) 提案のもの
9. Smith (1964) は基底部に *Intensifier* の slot を設ける。Bolinger (1967) も基底部に *a kind of +N* の slot を設けるよう主張している。Vendler (1968) は *be* 以外の *predication* より生成する。

REFERENCES

- Bolinger, Dwight. 1967. "*Adjectives in English : Attribution and Predication.*" *Lingua* Vol. 18, No. 1

Curme, George O. 1959. *Syntax*. (Tokyo)

岩倉国浩. 1969. “英語beについての一考察.” *Osaka Literary Review*

No.Ⅷ

Jacobs, Roderick A. & Rosenbaum, Peter S. 1968.

English Transformational Grammar. (Waltham, Mass)

中島文雄. 1961. 英文法の体系. (東京)

大塚高信編. 1959. 英文法辞典. (東京)

トマス, オーエン. 松浪有. 大井上滋訳. 1969. 英語教師の変換文法(東京)

Ross, John R. 1966 *A Proposed Rule of Tree-Pruning*.

Reprinted in Prentice-Hall. (1969)

Smith, Carlota S. 1964. *Determiners and Relative Clauses in a*

Generative Grammar of English. Reprinted in Prentice-Hall

(1969)

Vendler, Zeno, 1968, *Adjectives and Nominalization*. (The Hague)

Zandvoort, R. 1965. *A Handbook of English Grammar*. (東京)